

柏木の君は泣いたり笑つたりしながらかう云ふのであつた。侍従は宮は思つておいでになることもおありになるのであらうが、それを外へ現すのを恐れて居られるなご、云ふ事を話したのであつた。お瘦せになつたと云ふ顔が目に見えるやうに思つて柏木の君は悲しがつた。手燭の灯を持つて來させて柏木の君は宮のお手紙を見た。病み給ふ事を心苦しき事になし居りながら、それを尋ねうる身にもあらず。

立ちそひて消えやしましうき事を思ひみだるゝ心くらべに後れむとも思はず候。

と書いてあつた。

「うれしい私は死んでからこの宮さんのお言葉を聞いたと云ふ事ばかりでこの世界を思ひ出すだらう。外には何もないのだ。」と柏木の君は云つた。そのまた返事を横になりながら苦しうに休

み休み柏木の君は書いた。字も言葉も切れ切れなものであることは云ふ迄もない。

ゆくへなき空の煙となりぬとも思ふあたりは離れじおのれ夕はことに眺め給へ、咎むる人も現身の失せたる魂を思ふ事は許し候ふべし。

「あゝ、苦しい、もう書けない。餘り更けないうちに歸つてこれを見せして、もういよいよ駄目な私と云ふことを宮に申し上げておくれ、あゝ、何の因果でこんな戀を私はせねばならないのか。」

と云つて、泣き泣き柏木の君は寢床へ歸つた。女三の宮はこの日の夕方から腹痛を覚えておいてになつたのであつた。産の経験のある者は直ぐお産氣だと云つて騒いで源氏の君にもお知らせをしたので源氏の君は驚いて出ておいてになつた。お心の中では忌はしい疑ひの交らない子が生れるのであつたならどんなに珍しく嬉しく思はれる

であらうなごゝ口惜しく思つておいでになつた。然し人には氣取ら
すまいと思つておいでになるのであつたから僧なども多くお集めに
なつて安産の祈禱を餘念もないやうにさせておいでになつた。翌朝
の日の出の頃に生れたのは男の子であつた。女と違つて人に顔を見
られるのであるから似た處似ない處が誰の目にも分らないものでも
ないと思ひになつた源氏の君のお胸は騒いだ。忘られない昔の罪
の報いがこれであると言ふ事も切實にお感じにならずには居られな
かつたのであつた。珍しい末子の男子が高貴な母によつて生れたの
であるから、ごんなに源氏の君はこれを喜として居るであらうと思つ
て人は競つて祝ひの饗宴などを六條院へ持つて來てした。宮は小い
お身體で恐ろしいことを濟ませた跡の疲れで湯をお飲みになる力も
おありにならないやうであつた。この序に死んでしまひたいと思
ひになるお心も見えるのであつた。源氏の君は人目を十分に繕ひな

がらまだ若様を抱いて見ようとはされなかつた。
「をかしい院様、まだお抱きになつては悪いと申してもお子様と云ふ
ものは男親の抱きたがるものぢやありませんか。こんな若様がご
うしてお可愛くないのでせうね。」
と年の寄つた女達の云つて居るのが宮のお耳に入つた時宮はお泣き
になつた。これから後ごんなにこの母子が源氏の君の疎みものにな
るのであらうと思ひになつて、尼にならうと云ふ決心をこの時にさ
れたのであつた。夜なども源氏の君は此方の御殿ではお寝みになら
ない、晝は傍に來て居られることもあつた。
「氣分はどう、少し好いやうかね、私はそればかり氣にかけて居るのだ。」
と源氏の君はお云ひになつて、宮のお枕許の几帳から中をお覗きにな
るのであつた。宮は顔を少しお上げになつて
「私は死ぬやうに思ひますから尼にならうと思ひますの、さうしたら

生きて居られるかも知れませんか。」
と平常の調子とはまるで違つた沈着いたもの云ひで宮がお云ひになつた。

「そんな馬鹿なことがあるものか、苦しいやうでもね、産は誰でもすることなんだからね、まあ我慢して居て御らん、それでも何處までも悪いやうならその時にはさうなつても好いけれど。」
と源氏の君はお云ひになつた。お心のうちでは嬉しい事を考へてくれたと云ふやうな思ひもおしになるのであつた。自分の心でもこの夫婦の間に出來た隔てが取れるものとも思へないのであるから現狀を續けて居るのは何方の爲にも幸福ではないのだからとお思ひになりながら、この長い髪を切らすことが自分にはなし得られるだらうかと云ふお心も起るのであつたから、
「ねえ眞實にそんなことはもう思はないで丈夫になんでもならなけ

ればならないと努力してごらん。」
と云つておいでになつた。朱雀院は女三の宮のお産みになつた若様を頻りに見たくお思ひになるのであつたが、産の跡を煩つておいでになる云ふことをお聞きになつて非常に御心配をしておいでになつた。宮は院にもうお逢ひすることが出來ないでしまふのかと云つて泣いておいでになるのを御惑然にお思ひになつて源氏の君はこれを人傳にお云はせになつたのであつた。院は堪へ難いやうに悲しくお思ひになつて前からお報せもなしに不意に六條院へ出ておいでになつた。

「もう世の中の事は一切顧るのではないと思つて居てもやつぱりさうもならない。もし逆事があるとしたら逢つておかないのは親子とも迷ひの残ることだと思つて來ました。」
と院は源氏の君にお云ひになつた。院は華美な殿しい僧服はお着に

ならないで清らかな墨染の衣を着ておいでになつた。こんなお姿を源氏の君は羨しくもお思ひになりまた悲しくもお思ひになるのであつた。

「それ程の大病のやうではありませんが、唯前からの衰弱がひどいで心配して居ります。」

と源氏の君は云つておいでになつた。院は宮のお枕許へお通されになつて、

「祈禱僧のやうだけれど、まだそれ程の手腕もないのだ。」

と云つておいでになつた。宮をお見になつた院は流れる涙を袖で拭いておいでになつた。宮もお泣きになつて、

「私はとても生きて居られない氣持がいたしますから、かうして來て下さいました序に尼にして下さいました。」

とお云ひになつた。

「そんな心になることの出来たのは結構な事だけれど、若い身體なのだから後で後悔することはないかとよく考へて見ねば。」

と院はお云ひになつたが、自身からさう云ふのであるから尼になる事を許してやつてくれと源氏の君にお云ひになつた。

「この間うちから頻りにさう言ふことを云ひますけれど何かものけがそんな事を思はせるのではないかと思ふものですから、私は聞き入れはしないのです。」

と源氏の君はお云ひになつた。

「ものゝけが思はせるにしても悪いことではないのだから好いではないか、この儘で死なせた跡で望み通り佛の弟子にしてから死なせてあつたら後世の心配もなかつたのにと云ふやうな後悔をするかも知れないと私は思ふ。」

と院はお云ひになつた。お心の中では源氏の君の愛の深くないこと

で、始終安心が出来ないばかりでなく、世間でそんな事の取沙汰をされることも残念であるから、唯病氣のためと云ふことにして出家をさせた方が好いとお思ひになるのであつた。そして自分から譲つたものの中には廣い家もあるのであるから、其處へ住ませた方が好い、さう云ふきまりを生きて居るうちに附けておくのも悪くない、六條院と云つてもさうなればきつと出来るだけの親切は盡してくれるであらうとお思ひになつた。

「私がかうして来た序に受戒をさせよう。」

とお云ひになつた。源氏の君は慊らず思つておいでになることも皆忘れておしまひになつて、周章て几帳の中へお入りになつて、

「私を捨て、尼になるなど、そんな心になせあなたはなつたの氣を静めて湯でも飲んで、それから何かを食べて御らん佛の勤めをするのもこんな弱い身體で出来るものか。」

とお云ひになつた。宮は唯首をお振りになるだけであつた。源氏の君は自分を恨めしいと思ふやうな事もあつたのであらうかとお思ひになると御怒然で可愛さうでならない。夜が明けないうちに歸りたことから院はお云ひになつて、祈禱僧の中から宿徳の人をお選びになつて宮の髪をお切らせになつた。源氏の君は聲を上げて泣いておいでになつた。院はまして最愛の宮のかうおなりになつた傷まじさに萎れ返つてお歸りになつた。その跡のことである。祈禱につれてものゝけが出て来て人について、からからと笑つた。

「二人を取り返したと勝ち誇つて居るのが憎いから私はそれから此處へ来て居たのだ。」

どものゝけは云つた。柏木の君は宮の尼におなりになつたことを聞いてからは一層病が重つた。女二の宮がお可愛さうに思はれてならないのであつたが、父母が始終傍に居るのであるから、此處へお呼びし

て皆に顔を見られたりおしになるのは氣の毒であると思つて無理をしてでももう一度一條の家へ行くと思ふのを父も母も許さうとはしなかつた。柏木の君は繰返し繰返し跡へお残しする宮のことを母の夫人に頼むのであつた。

「私を何時迄生きて居ると思つてそんな向うの事を云つておくの。」と云つて夫人が泣くので弟の左大辨に遺言はするのであつた。弟達に慕はれて居た人で、末の小さいのなどは皆親のやうに思つて居た兄であつたからかうなつたことを悲しまない身内はない。陛下は危篤だと思ひなつて俄に權大納言をお興へになつた。喜びに興奮されてもう一度參内することもあらうかと思ひになつたのである。哀れな柏木の君は昇任の拜はともしに行ける身體ではなかつた。夕霧の君は始終見舞の人を遣して居るのであるが今日は昇進の祝に出て來た。祝に來た人の馬や車が柏木の君の居る方に附いた門の中に

充滿になつて居たがその人は起き上る事も出来ない重い容體であつた。夕霧の君だけを病室へ入れて柏木の君は逢つた。小さい時からなかの善かつた友でもあり従弟でもあるのであるから親兄弟の悲しみに劣らないほど死別れることを夕霧の君は悲しんで居た。今日だけは嬉しい日であるから心持よくして居るであらうかと思つたのであつたがその望みは外れた。柏木の君は烏帽子を胸の下に入れて身體を少し起さうとするのであつたがその様子がいかにも苦しうであつた。白い柔衣着物を幾つも着て蒲團に入つて居る病人は瘦せさらばつては居るが極めて艶に見えるのであつた。夕霧の君は涙を拭いて、

「こんな悲しいことはないと思ふ。あなたは思ふ。あなたのこの病氣は初めからどんな風にかう變つて來たのですか。」と云つた。

『自分には何時から重くなつたとは分りませんがねえもう然し駄目な事は事實なんです。祈禱などを無暗にされてその力でかうして引つ張られて居るやうなものですから苦しくてね、自分ではもう早く死んだ方が好いと思ふのです。それでもかうなつて見るとまた世の中に心残りのする事もあるんです。親にも孝養をせず、皇室の御恩も返されずと云ふやうなことは誰でも分る事ですが、外の混入つたことで兄弟にだつて云はれないことをあなたに聞いて置いて貰ひます。私は六條院に濟まないことを少ししてね、私はそれが氣に懸つて憂鬱な気分であらう暮して居ました處が、賀の日の舞の稽古の日にお呼びになつたので行つたのです。院が許し難いものとして確に私を思つていらつしやるお顔色を見て、その日から世の中が味氣なくなつて病ついたので。私は院の御恩を一日だつて忘れないで居るのに、弱味のある私をまた誰かが讒言をしたのでは

ないかとも思つてね、それが人にも云へない心残りなんです。きつと來世でだつてこのために私の魂は悶えるだらうと思ふのです。あなたからとりなして下さらないですか、死んだ跡でも院のお怒りが解けたら私はどんなに喜ぶか知れませんか。あなたにあの世から謝しますよ。』

と柏木の君は云つた。夕霧の君は心の中で思ひ合ふことがないでもないが、伏在して居ることはその事實程大きいものとはもとより知らないものである。

『そんな事はないでせう、あなたの誤解でせう、院はあなたの病氣を随分案じて居られますよ、けれどあなたはそんなに苦勞にして居ることを何故もう少し早く私に云つてくれなかつたのですか、もしそんな事實が假にあるとしても、私が必ず解決を附けますのに、もうそんなにあなたがなつた今になつては仕方がない。』

夕霧の君は真心からかう云ふのであつた。

「けれど死ぬとばかりも前には思はなかつたのですからさう急いでお話ししないでほしいと思つたのです。けれどこれは秘密にしておいて下さい。それから一條の宮さんも他人とはお思ひにならずに親切にして上げて下さい。まだ云ひたい事もありますけれど苦しいからもう失禮します、お歸り下さい。」

と云つて手を振つた。祈禱僧が来るし、父母も出て来たので泣く泣く夕霧の君は其處を出た。同腹の女御は云ふまでもないが、雲井の雁の君も非常に歎いて居た。玉鬘の君も兄弟の中でこの人とは一番親しいのであつたから祈禱僧なども多くさせて居た。女二の宮にも終に逢はない儘で柏木の君は泡の消えるやうに死んでしまつた。下に冷い心が見えないでもないが、表面は飽く迄尊敬して盡すだけのことは盡して居た人なのであつたから、お死別れになつたことを傍で見ると

氣の毒な程宮は歎いておいでになつた。短命な人であつたから何事にも冷淡な處があつたのであらうなご、今迄の事も思つておいでになつた。まして大臣や大臣夫人の思つて居ることは云ひ現しやうもない。尼宮も死んだとお聞きになるのはお悲しかつた。生れた子を見たかつたであらうとお思ひになつた。前生の因縁と云ふものを思つて泣いておいでになつた。女三の宮の若様の五十日の祝は三月の麗かな日に催された。源氏の君は病の快くおなりになつた宮をお見になると何時も尼にならないうで居てかうであつたら嬉しいであらうとお思ひになるのであつた。お髪は切つた人が惜んで長く残したのであつたから額には尼額でも後から見るとお姿は餘りお變りもないやうである。薄墨色に薄樺などを重ねて着ておいでになるお姿が艶に見られるのである。

「黒い着物と云ふものは情なくなるものだね、見ると私は目がくらむ

やうに思ふ。それでもかうして始終あなたを見ることだけは出来ると思つても見るのだが、やつぱりあなたに捨てられたと云ふ悲しい氣持は除かない。可愛相だと私を思つて頂戴。」
「尼になつたのですもの、人のことを可愛相だなどと思つてはならないのでせう、おもへませんわ。」

「私のごとでなくては思へることもある筈だ。」

と聞えない程に源氏の君は云つておいでになつて、それから若様を伴れて來させてお見になるのであつた。乳母には立派な身元の人が幾人も來て居るのである。源氏の君は乳母に若様の扱ひ方についていろいろの注意をされた。若様は氣持よく肥つて美しくい。源氏の君は夕霧の君のこんな頃のことを思ひ出して御覽になつたが、この顔とは全で別物な記憶がお浮びになる。女御のお生みした若宮方は皆陛下にお似になつて王者の氣高さはあつてもお美しくいと云ふのでは

あまりないのであるが、この若様は品のある上に愛敬があつて眉のあたりが匂ひやかで目附が奥床しい。源氏の君のお思ひなしか柏木の君によく似て居た。宮は柏木の君の子ともさう確に思つておいでになるのではないらしい。自身はもとより忘れがたみでもあつたならと云つて歎いて居る親達に見せることも出来ない子を殘して行つた男の心を源氏の君は哀れにお思ひになるのであつた。自己を重じて居た立派な紳士が自身の心から病を起して死んだかとお思ひになる。と惜しくもお思ひになつて涙を零しておいでになつた。女達の皆彼方へ行つた時に源氏の君は宮の傍へお寄りになつて、
「この人をどう思ふの可愛くないの、こんな人を置いて出家がどうして出來たの情のない人だ。」
とお云ひになつた。宮は顔を赤めておいでになつた。
誰が世にか種はまきしと人とはばいかにこたへん岩根の松は

こんな歌を源氏の君は宮にお唄きになつた。宮はひれ伏しておしまひになつた。夕霧の君は柏木の君が危篤になつてから云つたことを思ひ出して、もう少し善い時であつたのなら、はしく聞くのであつた。が事の真相は、ごんな事であつたらうと思つて居た。その時のもの哀れであつたことを思ひ出すのも悲しかつた。女三の宮が尼におなりになることを源氏の君のお許しになつたのも不思議と云へば随分不思議である。紫の君が危篤な時に泣く泣く尼にして欲しいと云つたのもお妨げになつたのではないかなど、それとこれと一緒にして考へたり、別にして思つたりして居た。女三の宮を戀しく思つて居る心が時々自分の目に附いたこともあつた。うち見は極めて沈着な人で、この人は何を思つて居るか、と云ふことが容易く分らないやうな人であつたが、情に弱い處が、確に陰にはあつた、もしそんなことで過失をしたのであつたなら、女も氣の毒である、自身も死んでしまつてつまらない

ではないか、皆因果の決つたことかも知れないが、それにうら勝つ力がやつぱり不足して居た人だつたなど、も柏木の君のことを思つて居た。法事のことなどは左大辨が父に代つて皆して居た。七日七日を大臣に知らせると、大臣は、「俺には何も聞かせないで、おいてくれ、餘り悲しいと俺が思ふのは彼の障りになるだらうから。」と云つて居た。一條の家では女達も皆喪服の寂しい姿をして居た。櫻が咲いても悲しいことばかりが誰にも思はれるのであつた。晝頃に前驅が人を追ふ聲がして、この家の門で留つた車があつた。「うつかりと殿様のお歸りかと思ひましたわ。」と云つて泣く女もあつた。夕霧の君が來たのであつた。清かな風采をして車を降りて來た客は縁に近い座敷に請せられた。宮の生母の更衣が逢つた。この宮のことに附いて柏木の君から聞いた遺言もあ

つたのであるから御訪問をしたいと心掛けて居たのであつたが今迄は公事が忙しかつたからなご、夕霧の君は涙を零しながら云つて、それから宮に云ふお吊詞を述べた。更衣も鼻聲になつて、

「宮様は片時も残つて居られないやうにお歎きになるのですから、傍に居てどんなに氣を遣ふか知れませんが、お聞きになつたことかも知れませんが、初めから私はこの御縁に賛成はいたしませんでしたの、仕方がないとは云ひながらも院をもう少しお諫めすれば好かつた、と、その後も時々思つたことも御座いましたの、けれどこんなにお死別になつて若い未亡人におなりにならうとまでは想像いたしませんでした。唯宮様方はお片附きにならずに獨身でおいでになるのが奥床しいものだ、と古い頭では思つて居りましたのです。この宮様はこんな何方つかすなお身の上におなりあそばしたのですわ、さうですからこんな折にはそんな思召ならお薨れになる方が好

いやうなもの、お生みした私の身にはさうも思へませんから。」
なご、更衣は云つて居た。この人は朱雀院の宮中では才媛と呼ばれた花やかな更衣だつたのである。女達は柏木の君よりは五つ六つ若い美しい夕霧の君を悲しさも忘れて覗いて居た。前關白家へその歸りに夕霧の君は寄つた。躊躇ながら逢つた大臣は瘦せて居た顔の髭も澤山伸びて居た。その顔を見た時から夕霧の君は胸の迫るのを覺えたのであつたが紛らして居た。大臣は死んだ子とこの人との仲の善かつたのを思ひ出すと際限もなく涙が溢れるのであつた。夕霧の君は一條の家に行つたことなどを話した。

「あなたの母様が死んだ時、こんな悲しいことはないと思つたがね、女は隠れて居るものだから悲しいことも陰に潜んで居るだけだつたが、男の死んだのは關係が複雑だからいろいろなことが思はれて悲しくばかりなる。」

こんなことを大臣は云つた。夕霧の君は一條の家をよく訪ねて行つた。初夏の羅の几帳もまだ黒い色で、それが白い簾に透つて居て、同じ色の姿をした女の童なども趣きはあるが寂しい。夕霧の君は今日は縁に座つて居た。更衣は少し病氣をして居て、話すことを物憂がつて女達に應接をさせて居た。柏の木と楓の木が外の木よりも若々しい色をして、枝を差し換して居るのを夕霧の君は見つて、

「あの二本の木は頼もしさうですね。」

とこんな事を云つて、それから、

告げてましわが思ふ事いちやく葉守の神の許しありきと

と云ふ歌を宮に申し上げてくれと云つた。少將と云ふ女に更衣が、

「そんなことをお云ひ遊ばすと、深い御親切が無になりますよ。」

と云はせた。さう云はれても仕方のない事であると思つて夕霧の君は微笑んで居た。更衣が出て来る様子であつたから夕霧の君は居す

まひを直したりして居た。更衣はいかにも病んで居るらしい。

「そんなに何時迄も悲しんでおいでになつては眞實にお身體を損ね

てしまひますよ、皆前生の約束ですから諦めて忘れておしまひにな

らなければいけません。」

なご、云つて夕霧の君は慰めて居た。夕霧の君は女二の宮を戀しく

思ふやうになつたのである。結婚をした後でそれ程の方でないこと

が分つて、自分の愛情が醒めるやうなことがあつてはますます人笑は

れの宮におさせするやうなものであるから、慎重に考へねばならぬこ

とであるとも思ふのであるが、顔はお美しくくない方であつても心の

なつかしい人であつたなら自分は決して疎かにはすまいと固く思ふ

處もあるのであつた。

「私を右衛門督とお思ひになつて、どんな事でも御遠慮なく御相談下

れ。」

など、宮をお娶りしたいとも露骨に云はないのであつたが、それとなく夕霧の君はほのめかして歸つた。

「お父様の院とはまた違つたお美しくしさのおありになる方です、實に立派な若い大將様ですわね。」

など、女達は云つて居た。死んだ右衛門督と云ふ追憶の言葉を誰も云はない人はなかつた。源氏の君はまして哀れにお思ひ出しになるのであつた。秋には女三の宮の若様がもう這ひ出すやうになつた。



源氏の君は柏木の君の一周忌に讀經の寄附などをされた。何も知らない若様の顔をお見になると堪へ難い程故人が哀れにお思はれに
なるのでまた別に黄金百兩をお贈りになつた。夕霧の君もいろいろの寄附や供物をした。大臣家の外に女二の宮の方へも贈物をした。この人が兄弟達よりも勝れた志を見せると云つて大臣も夫人も嬉しがつて居た。朱雀院は女二の宮も缺けたお身の上におなりになつたのであるから女三の宮の尼になられたのと一緒に心苦しいお思ひが殖えたのであるが、一切現世のことで煩悶はすまいとお思ひになつて、



横
笛



佛の勤めをおしになりながら、三の宮もこの尊い道のことをして居るのだと思つておいでになつた。住んでおいでになる寺の傍で採れた竹の子を春は宮にお贈りになるのであつた。それにお添へになつた手紙にも同じ佛の手に救はれて居るのを喜ぶと云ふやうな事が書いておありになつた。それをお見になつた源氏の君は院のお心を哀れにお思ひになつた。乳母の處で寝て居た若様が目を覺して這つて来た。源氏の君のお袖を引つ張つて立たうとする様子が可愛くて、白いものゝ上に紅梅色の上着を裾長く着て居るのが美しい。白い跡がすらりとした子は柳の木を削つて拵へたやうである。頭の削り跡が露草の花汁で染めたやうである。口つきや目つきを見ると柏木の君がよくお思ひ出されるのであるが、その人はこれ程の勝れた清らかさなどはなかつた宮にも似て居ない、この澄渡つたやうな氣高さは自分の子としても耻しくないと思つて源氏の君は見えておいでになつ

た。少しばかりは歩くことも出来るのである。院から持せてお遣しになつた竹の子の料理の入つた器の傍へ寄つて、若様は中の竹の子を手で掴んで横へ投げたり、口へ持つて行つて噛んで捨てたりするのであつた。

「誰かあれをお隠し、今から食物に目が附くと云つて人が笑ふだらうから。」

と源氏の君は笑ひながらお云ひになつた。若様をお抱きになつて、「私は小さい子供を澤山見ないものだから、この位の時と云ふものは唯あごけない顔をして居るだけのものかと思つて居たが、この子は違ふね、實に美しい處があるぢやないか、内親王と同じ家でこんな人の大きくなつて行くのは心配な事だ、何方のためにもさうだ。けれどもその時を私が見られるものか。」とお云ひになつた。

「そんなことをまあ仰つしやいます。」
と傍に居た女が云つた。若様は齒が出掛けて居る齒莖が痒いものであるから竹の子を無暗に噛むよだれが流れる。

「穢いことをする可愛い人だね、おまへを見ると父様は厭なことも皆忘れてしまふ。」

と云つて下へお置きになると若様はまたそゝくさと這ひ廻るのであつた。大きくなる程美しくくなる若様を御覧になつて源氏の君は心から可愛くなつてお行きになる。こんな人を自分に與へるために神佛などがさせた宮の過失であらうかなど、迄お思ひになる事もあつた。夕霧の君はとう云ふ機會をもらへて院と柏木の君とのいきさつを知つたら好いであらう、あの死際に心を苦しめて居た様子が院に告げられようかと何時も思つて居た。もの哀れな氣のする秋の夕方に夕霧の君はまた女二の宮の一條の家へ行つた。宮は琴をそれ迄弾い

ておいでになつたらしい。縁に近い座に居た人の俄に奥へ入つたけはひがした。なつかしい衣の香りなどがなほ漂つて居た。自身の家が人出入が烈しくて子供が大勢で騒ぐのに馴れて居る夕霧の君は、静かなこの家を飛び離れた床しい世界へ来たやうに思ふのである。少しは荒れたやうではあるが、飽くまで品の善い氣高い氣分の家である。秋草が野のやうに亂れて咲いた中に蟲が啼いて居る庭をちつと夕霧の君は見つて居た。其處にあつた七絃の琴を引き寄せて叩いて見た。律の調子に絃が合はされてあつてよく弾き馴らされたものなつかしい氣のする琴であつた。こんな身に沁む處で男は心にも無かつた戀に陥ることもあるのであらうなぞ、夕霧の君は思つて居た。面白曲の一節を弾いて手を廢めて、

「宮様のよく遊ばす琴で、この頃の悲しいお心持を伺はせて頂けないでせうか。」

と夕霧の君は更衣に云つた。

「お上手ではないので御座いますよ、院が宮様方をお集めになつて、それだけの琴をお弾かせになりましたが、その時も二の宮は音楽の方の人ぢやないとお云ひになつた位なんです、この頃はお氣を紛らすさびになるかとお思ひになつて唯弾いてお見になるやうなんで御座いますよ。」

と更衣は云つた。

「そんな思ひでお弾きになるのを私はお聞きいたしたいのです。」

「あなたこそお聞かせになつたら好いでせう。」

と更衣は云つた。夕霧の君の弾かないのを更衣は強ひてとも云はない、月が出て澄み渡つた空を雁が鳴いて通つて身に沁むやうな風が吹くのに誘はれたやうに宮が十三絃を掻き合せになる音がほのかにした。夕霧の君は強くそれに心を引かれて自身も琵琶を借りた。

「お相手顔にこんなことをするのは耻しいのですが、この曲だけは合

させて頂くべきものだと思います。」

かう云つて夕霧の君の弾き初めたのは想夫戀である。御簾の中の宮の琴をおそゝのかしするのであつたが、宮は躊躇つておいでになつた。そして末の方を少し合してお弾きになつた。そのなつかしき爪音がそれで止んでしまつたことを夕霧の君は恨しい程惜しく思つた。

「あまり夜更しをいたしましたから今日はもう歸りますが、また参つて何か合させて頂かうと思ひます。樂器の調子をこのまゝにして私をお待ちになつて下さいませうか。」

と夕霧の君は云つた。戀を遂げたいと云ふことを何時もこの人はこの位の扣へ目な云ひ現しやうをするのである。

「眞實にわづかしかお弾きにならないのですから、今度の時を楽しみにいたして居りませう。」

と更衣は云つて、そして横笛を夕霧の君に贈つた。

「これは大納言のだったので御座いますよ、大切にいたして居りましが、吹手のない家に置いてもいたしかたがありませんからさし上げます。」

「こんな品を私などの上手ぢやないものゝもつのは氣がさすやうですぬ。」

と云つて夕霧の君は手に取つて見たが見覚えのある笛であつた。愛藏して居て自分などはこの笛を十分に吹くことはとても出来ない、これは死んだ跡で自分の一番好きな人にかたみに遣るのだなどと云つて居たことも思ひ出すのであつた。三條の家ではもう座敷の戸が皆閉めて錠が下ろされてあつた。夕霧の君が女二の宮に戀をして居るために頻りに親切を見せて居るなど、雲井の雁の君に云つた者があつたので、門を入つた車の音などは聞いたのであらうが寝入つた風を

して居るらしい。

「何故こんなに閉めてしまつたの、この好い月を見たくない人もあると見えるね。」

こんなことを云ひながら漸く開けられた座敷の中へ夕霧の君は入つて来た。その戸を開けた儘にして御簾を上げてその際で夕霧の君は横になつて居た。

「こんな月を見ないで寝て居ることがあるものか、此處まで出ていらつしやい。」

かう夕霧の君は云つたが雲井の雁の君は耳に入らない風をして居た。若様達の寝怯れて立てる聲が彼方此方にして女達なども見える所で幾人も寝て居るこの夜の家の一條の家との趣きの違つたことを夕霧の君は思つて居た。貰つた笛を吹きながら、自分が歸つた跡でも物思ひのある人達は急に寝ることもしないで居るであらう、こんな時には

また琴を弾くであらう、更衣も七絃の琴の名人だからなご、思つて居た。何故あゝ迄奥床しく思はれる宮を大納言は氣に入らないやうに思つたのであらうと思つて、これも女三の宮について自分の持つて居る不審と關聯したことはないかなご、それからそれへと夕霧の君は思つた。自身と雲井の雁の君とのした戀も思つて、あれ程に思はれた人であるから今日のやうに慢じた妻になつて居るのも仕方がないなご、も思つた。少し寝入つたと思ふと柏木の君が昔の姿で自身の傍に居るのであつた。夢の中でも死んだ從兄はこの横笛に心を引かれて來たのだと夕霧の君は思ふのであつた。

「これはあなたに上げようと思つたのぢやない。」

と柏木の君は云つた。夕霧の君は何か問はうとしたが若様が泣いた聲で目が覺めた。その子が乳を吐いたりしたので、乳母や女達も起き騒ぐのであつた。雲井の雁の君も灯を近くへ持つて來させて下つ

た髪を容姿も構はず耳の後へ挟んで若様を抱いて居た。よく肥つた白い胸を開けて乳を飲ませて見たりなごして居る。若様も色の白い可愛い子である。乳は張りさうにない小さい乳なのである。夕霧の君も傍へ來て、

「どうだ。」

なご、云つて居た。魔を追ひ拂ふ米を撒いたりする騒がしさに夕霧の君は見た悲しい夢も紛らされるやうであつた。

「この子は何處か、苦しうですわ。美くしい方のことを思つて遅いのに戸を開けて月を見て居たりなさるものだから、其處から魔が入つて來てこの子についたのですよ。」

雲井の雁の君は憎氣のない顔をしてかう云つた。夕霧の君は笑つて、「さうかね、魔が來たのかね、なる程私が戸を開けなければ入つて來る筈はないね。賢いことを云ふ人になつたね。」

と云つた。

「早く行つてお寝みなさいよ、こんな見苦しい處を見るものぢやありませんわ。」

と云つて、明い灯で顔を見られるのを耻ぢるやうにする雲井の雁の君を愛すべき妻である夕霧の君は思つて居た。夜通し若様は泣き續けたので誰も寝ることは出来なかつたのであつた。夕霧の君は夢を思ひ出して笛をどうすれば好いかと惑うて居た。笛を吹くことのない女に遣りたいと思ふ理由もない、ごんな男にこれを渡したいのだからと思ふのであるが考への附きやうがない。こんなことに魂の執して居ては成佛が出来ないであらうと思つて、直ぐその朝僧に頼んで經を讀ませて居た。柏木の君の好きであつた寺でも供養をするやうにした。笛を寺へ納めてしまはうとも思つたが貰つて直ぐそんなことをするのは一條の人達に濟まないとも思ふのであつた。夕霧の君が六

條院へ行つた時、源氏の君は女御の處へ行つておいでになつた。第三の皇子をまた紫の君は手許にお置きしてお育てして居るのであるが、上の宮達よりは美しくしくて今年三歳でおありになる。走つておいでになつた。

「大將宮を抱いて院の處へ伴れて行つて頂戴。」
と宮はお云ひになつた。

「さあいらつしやい。けれど女王さんのお座敷の御簾の前を通るのが恥しいですよ。」

と云つて、夕霧の君は膝の上で宮をお抱きして居た。

「誰も見るものか、宮は顔を隠して行く。」

と三の宮はお云ひになつて、袖を顔へお被りになるのを夕霧の君はお可愛く思つてお伴れするのであつた。此方の御殿では二の宮が女三の宮の若様と一緒に遊んでおいでになつた。宮を下へお降しする影

を目敏くお見になつた二の宮が、

「私が大將に抱かれるのだ。」

とお云ひになる

「宮の大將よ。」

と三の宮はお云ひになる。源氏の君も見ておいでになつて、

「そんな喧嘩をするものぢやありません。大將は陛下のお附きです

よ、あなた方のぢやない。」

とお云ひになつた。夕霧の君も笑つて、

「二の宮さんはお兄様らしくすぐお譲りになりますね、お小くてもな

かなかえらい。」

と云つて居た。源氏の君はお二人とも可愛くてならないやうに見比

べておいでになつた。

「こんな處では大將に失禮だ。彼方へ行つて話をしよう。」

と云つて源氏の君が立たうとおしになるのを、二人の宮はおまつはりになる。宮の若様は宮達と同じにはして置くべきではないと思ひになるのであるが、女三の宮がお僻みになるのが可愛さうにお思ひになつて、これも同じ程に大切にしておいでになるのであつた。夕霧の君はまだ若様をよく見たことがないから見たいと思つて、御簾から少し顔を出して居るのを花の萎れた枝が其處に落ちてあるのを取つて、それを見せかけて招くと若様は走つて來た。薄藍色の直衣を着て居る顔が白くて美しいことは宮達よりも勝つて見えた。笑ふ目や口元が柏木の君によく似て居ると思ふのは、自分の疑ひからかとも思ふが、きつと源氏の君もさう思つて居られるに違ひないと思ふと、それを色にもお出しにならないお性質が奥床しく思はれるのであつた。宮達は此方の思ひなしで氣高くはお見えになるが世間並の唯美しいお子供なのであるが、この若様の顔は出抜けた秀麗な處があるのであ

る。夕霧の君は顔を見ながら、自分の思つて居ることが眞實であつたなら、柏木の君の父の大臣が子だと云つて名乗つて来るものもないと云つて歎いて居るのに、その人に知らしてやることの出来ないのは罪なことであるとも思ふのであつたが、またそんな馬鹿げたことがあらうかと云ふ打ち消しの心の起らないではない。若様が直ぐ馴れてしまつたのを可愛く思ひながら夕霧の君は院と御一緒に居間の方へ行つた。夕霧の君は女二の宮を昨日御訪問をしたことなどを話した。源氏の君は微笑ながら聞いておいでになつた。

「想夫戀をおまへが弾いたのは小説らしい事だが、何故宮さんは琴をお弾きになつたらう、人の心をそれで引き附けることになつてはならないと云ふ女は用心をするのがいいのだがねえ。おまへは昔の友誼を忘れないでさうしてその人達に親切にして居るのは好いけれど、出来ることなら誰の非難も受けなくて済む清い交際をして行

かなければいけないよ。双方のためだから。」

と源氏の君はお云ひになつた。他の者にはそんなことをお云ひになるが、御自身であつたらそんな心掛けを遵奉しておいでになるであらうかなど、夕霧の君は思つて居た。

「私は非難の起るやうなことをしようと思つて居るのぢやありません。唯同情をいたして居るだけです。想夫戀は宮さんからお弾きかけになつたのなら何ですけれど私の弾いて居たしまひの方を少しお合せになつただけですから趣がありました。場合場合でさう定規で決めたやうにばかりしないでいゝこともあるでせう。それ程若い方でもないのですから、男にどう思はせようそんなお考へはなかつたでせう、二の宮さんは誠に奥床しい方です。」

こんなことを云つてそれから話の續きのやうにして柏木の君の横笛のことを云つた。夢のことも云つた。

「それは私の貰ふべきものだ、あれは陽成院のお笛だつたのが式部卿の宮に傳つて、それから大納言が子供の時笛を美事に吹いた萩の宴か何かの時におやりになつたのだ。」

と源氏の君はお云ひになつて、柏木の君の遣りたいと思ふのに紛れもない人が自分の子としてこの家で大きくなつて行くのだなごと思つておいでになつた。賢い大將はもう何事も想像して知つて居るかも知れないともお思ひになつた。この序に夕霧の君は柏木の君の死際に云つたことをお話するのであつた。

「どう云ふことなんでしょうか、今にその理由が私に分りません。」

かう夕霧の君は言葉を結んだ。自分が思つたやうにそんなことをやつぱり聞いて居たのだと源氏の君はお思ひになるのであつた。暫く考へるやうな風を源氏の君は見せておいでになつたが、

「私にも分らない、あの男にそんなに氣を揉ますことを私はした覚え

がないがね、おまへが見たと云ふ夢についての話はまたそのうちしよう。」

と源氏の君はお云ひになつただけであつたから、云はない方が好かつたのではないかなご夕霧の君は思つて居た。



夏の蓮の花の盛りに新しく造られた女三の宮の持佛の供養があつた。宮は黄泉の六道にさまよつて居る衆生のために法華經を六部お寫しになつたのであつて、宮の御持經は源氏の君が書かれたのであつた。僧に出す法服の用意などは紫の君が皆したのである。現世で持つておいでになつた勝れた榮華を捨てて佛の御弟子になられた宮は、尊い永劫の命をお得になるのであると云ふやうに講師は述べた。勅使も朱雀院のお使も來たのであつた。朱雀院は三條の家へ宮がお移りになつた方が決りが好いであらうとお云ひになるのであつたが源



鈴
蟲



氏の君は離れて住んで朝夕に逢ふ事の出来なくなるのは初めの志とは違ふせめて自分の生きて居る間だけでもこの儘にして居て欲しいと云つておいでになつた。そしてまた三條の家も源氏の君の方から修繕をさせたり建増をさせたりさせてお置きになるのであつた。秋になつてから尼宮の御殿の庭の一部を野のやうにお作らせになつた。佛の阿伽の水を置く棚などがその草花の中に建てられてあつて艶な趣があつた。宮のお後を追うてわれもわれもと剃髪をしたがる女達があつたが心の眞實に定つて尼になつたのでない者の交るのとは他の者の迷惑になる事にもならうと源氏の君はお云ひになつて、乳母や年の行つた者の外にはお選りになつた十幾人だけの若い人が尼になつた。風の少し冷く思はれる夕方に源氏の君がおいになつて、蟲の聲を聞くやうにしておいでになりながら昔を今にした添臥をして見ようぞ宮をおそゝのかしになるのであつた。宮はあるまじい難題と思

つて聞ておいでになつた。人目には變りのない夫婦とお見せ掛けになりながら、指の先にも觸れまいとおしになる夜々の隔心の悲しさが積つては尼になる氣にも自分をしたのではないか、自分が何と思ふとお思ひになつてこんな事をお云ひになるのかと苦しく思つておいでになつた。三條の家へ移つて行つた方が好いやうにこんな時には何時もお思ひになるのであつたが、それが思ひ切つてお云ひになれる方でもなかつた。十五夜の月がまだ出ない薄暗い夕方に宮は佛前で念佛をしておいでになつた。若い尼が二三人庭に下りて佛に捧げる花の花瓶を洗つたり、水を入れたりする音をさせて居た。源氏の君がおいでになつて、

「大層蟲の鳴く晩だ。」

とお云ひになつて、そして御自身も低く宮の念佛に聲を合しておいになつた。いろいろの蟲の鳴く中に鈴蟲の聲が勝れて華やかに美しく

しく聞える。

「中宮さんは松蟲がお好きでね、彼處の庭へは毎年遠方からも取寄せ
て放させておいでになるが、よく死ぬ蟲でね、鳴いて居るのが段々少
くなつて行くやうだ。山の中とか、人の通らない松原とかにはよく
鳴くものだがね、人見知りをするやうで憎い處があるね、鈴蟲は若々
しくてそんな見さかひをてんでしないで何處でも鳴きたいと云
ふ風だから可愛い。」

と源氏の君はお云ひになつた。

「私はもう何にも興味を持つて居ませんけれど、鈴蟲だけは嫌ひにな
られませんか。」

と大様な調子で宮はお云ひになつた。源氏の君は珍しく一絃琴を持
つて來させて弾いてお見になるのであつた。宮は珠數を爪ぐることも
もお忘れになつて琴に身を入れて聞いておいでになつた。例のやう

に月見をおしになることゝ思つて兵部卿の宮がおいでになつた。夕
霧の君も若い人達を伴つて來たのであつたが、宮の御殿で源氏の君の
弾いておいでになる琴の音がするので皆此方へ來た。

「皆よくいらつした。」

とお云ひになつて源氏の君はその中でも兵部卿の宮だけは御自身の
おいでになる座敷へお通しになつた。宮中でも觀月の宴がある筈だ
つたのであるが、それが俄に止まつたので物足らず思つた人達はまた
六條院へ來た。蟲の聲の批評を仕合ひなごして、それから客にもいろ
いろな琴をお弾せになつて、

「かう云ふ晩はこの世界以外の世界のことまでが意識に上るものだ
ね。それにつけても大納言が思ひ出されるよ、惜しい人だつた。」

と源氏の君は云つておいでになつた。こんな話を御簾の中の尼宮は
どう聞いて居るだらうと云ふお心も一方ではありながらその人が傷

ましくて涙も零しておいでになつた。
「今夜は鈴蟲の宴にして夜通し遊ぶのが好からう。」
と云つておいでになつた處へ冷泉院からお使が手紙を持って來た。
蓬生の玉のみくらにあらねども變らずとひぬ秋の夜の月
こんなお歌があつておなじくはお出でがありがたいと云ふやうなこと
も書かれてあるのであつた。源氏の君は來て居た人達をお伴れにな
つてお出掛けになつた。冷泉院には左大辨式部大輔など、云ふ人達
が宵から伺候して居るのである。直ぐ身輕にかうして源氏の君のお
いでになつたのを冷泉院はお喜びになつた。まだ盛の帝王と申し上
げてよいお姿で日蔭の人になつておいでになる院をお見になると源
氏の君は云ひやうもない寂しさの哀れさをお覺えになるのであつ
た。詩歌を多く人々が作つて夜の明方にはその詩などが席上で讀ま
れた。朝になつて他の人等は歸つたが源氏の君は中宮の處へおいで

になつた。
「此方は唯今では來よくなつたのですから始終來て昔のお話をした
り聞かせていたゞいたゞ思つて居るのですが、出るとなる
とやつぱり大層なことになるものですから。」
とお云ひになつて、それから、
「私は近頃ますます出家をしたい心になつて居るのですが、さうなり
ましたら何時も云ふことですが跡の者をかばつてやつて下さい。」
こんなことをお云ひになつた。
「ひつかしい御所に住んで居りました頃より却て今になつてお目に
懸る時も少くなりましたのを私は心細くばかり思つて居りますの、
私もこの世にさう執着はいたして居りませんのですから佛のお弟
子になりたいと思ふ心もあるのですけれど、それもあなたに申し上
げてからのこと、思つて居りましたの私は何よりもお頼りに思つ

て居るものですから、あなたが出家したらなご、お云ひになるのを聞くと悲しくなります。」

と宮は何時と同じやうな若々しい少女らしい調子でお云ひになった。「御所においでになる頃は少しづつ、でも年に何回か決つたお暇も出ますから、あなたを家へお迎へするとも出来て、それをまた喜んで居りました。然し今はもう院がお歸りになるのをお留めになればさうしてその儘で御一緒に居られるのが好いことだと思つて居ます。いかにこの世は厭ふべきものと云つても、あなたなどは尼にならなければならぬと云ふ理由は少しもないのではありませんか。」

と源氏の君はお云ひになつた。中宮は自身の心がよくお分りにならないのかともごかしくも恨めしくもお思ひになつた。六條の君が地獄に墮ちて居ると云ふのはごんな苦に漬つて居られるのであらう、死んだ跡までも死霊などが残つて人に憎まれて居られることが子とし

てごんなに悲しいか、源氏の君は自分に隠しておいでになるが、誰が云ふとなく自分の聞いた紫の君の病氣の時に出来たものけ、假にもなつかしい母の死霊と云ふそのものはごんなことを云つたのであらうか、それも聞きたいと中宮は思つておいでになるのであるがさうともお云ひになることは出来なかつたので、

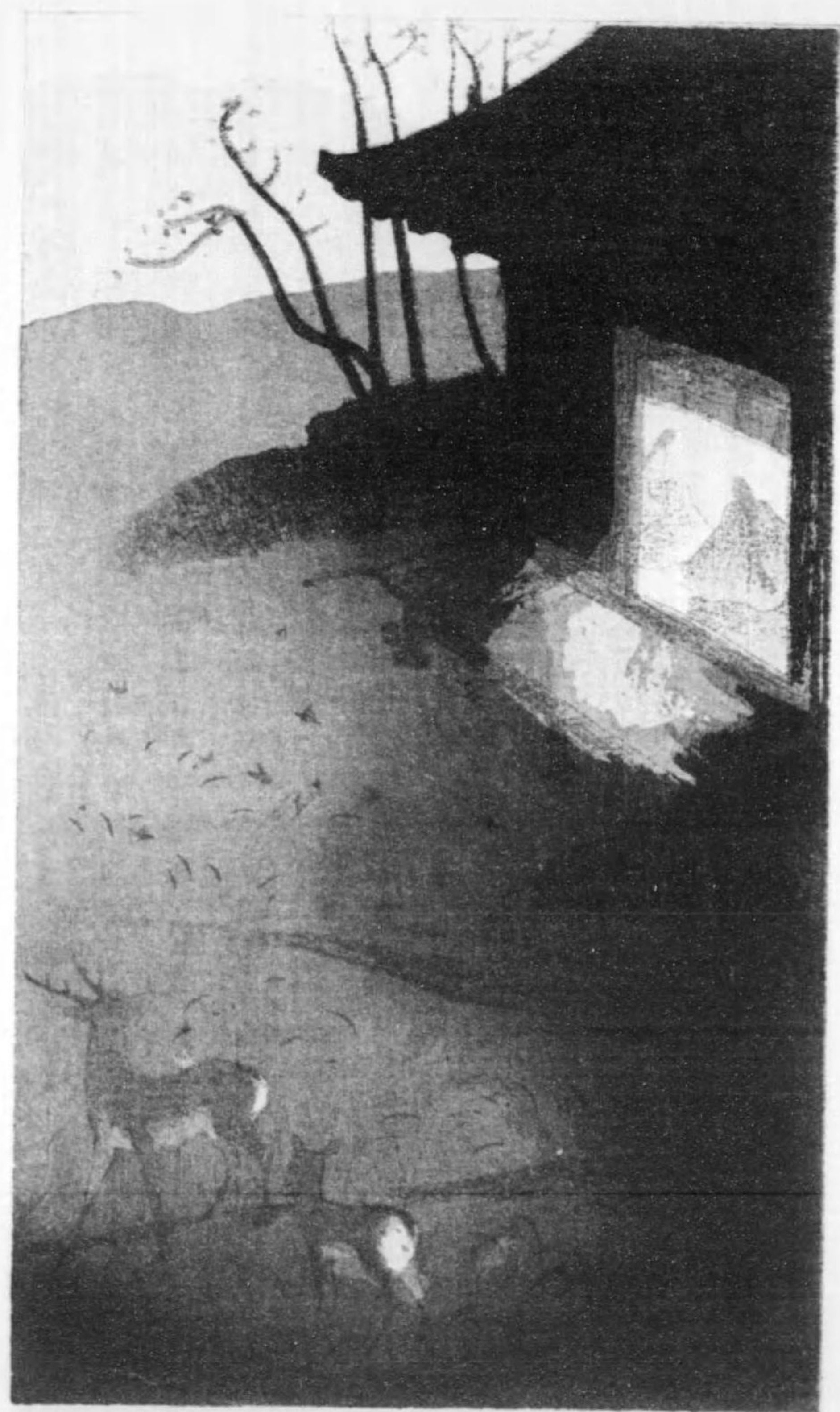
「母が死にましても成佛を仕損つて居るとか云ふ者がこの頃ありますから、私は今迄母に別れた悲しさばかりを思つて居まして、そんなことに氣が附かなかつたのを後悔しまして、それからせめて私の信仰で母を助けることが出来たらと思ふやうになつたのですわ。」

と、それとなくその事をお云ひになつた。中宮がさうお思ひになるのは無理ならぬことであると源氏の君はお思ひになつて、

「あなたの母様の持つて居られたやうな煩惱は誰も少しは持つて居るのですよ。さう知つても尼にも坊様にもなることはなかなか出

来ないものなんですよ。あなただつて母様のためにはさうもお思ひになれるでせうが御自身の方を考へて御覽なさい。却てより一層の煩惱が生れはしませんか、母様のためにはせつせと供養をしてお上げになればそれで好いでせう。私なども古い昔からの希望でありながら些細なほだしが残るのを心配してかうして居るのですから。」

とお云ひになつた。互にこんなことは云つておいでになるが、第三者が見れば佛の弟子には到底おなりになれさうでない花やかな人達と思はれるのである。



夕霧の君は月日に添へて女二の宮を戀しく思ふことが殖えて行くのであつた。火のやうな心を抱きながら表面には故人との友誼を重じて一條の家の人達に盡して居るやうに見せて居るのであつた。宮はまだ取次なしに夕霧の君とお話しになることはないのであるから、何時この思ひをお知らせすることが出来ようかとばかり男は思つて居た。更衣はもののけにつかれたやうに煩つて小野に持つて居る別荘へ養生に移つて行つた。もののけをよく拂ひ除ける更衣の昔からの祈禱僧の律師があつて、その人を叡山の横川の寺から呼ぶのにも都



夕霧



合が好いからでもあつた。その日には入用の大勢の乗る車や供の人
を夕霧の君は自身の方から遣つた。却て柏木の君の兄弟などは他の
ことに紛れてこんな氣も附かないで居るのである。左大辨は宮を得
ようとして懸想めいたことを云つて退けられたとか云ふことである。
大きい祈禱が行はれると聞いて夕霧の君は僧に出す布施の絹や麻や
法服なども贈つた。病んで居る更衣はそれに添つて来た手紙の返事
を書くことも出来ない。自分等から返事を出すのは餘り禮がなさ過
ぎると云つて女達は宮をお勧めしてお書かせした。宮のお字は美く
しいものであつた。文章もなつかしい。夕霧の君はお返事のそれが
見たさに毎日のやうに小野の山莊の人に手紙を書いた。行きたく思
ひながら妬むやうなことを云ふ雲井の雁の君に氣がかねられて出か
けにくいのであつた。八月の中頃になつて、

「郊外の景色もこの頃は好いだらうから見たくもあるし、それに××

律師が珍しく山から下りて来て居ると云ふことでもあるから逢ひ
たくもあるし、一條の更衣さんの病氣を見舞がてら行つて来る。」
と云つて供の者も大勢は伴れずに夕霧の君は小野へ行つた。松が崎
あたりの山が美しく紅葉で彩られて居た。小柴垣の家ではあるが品
の好い山莊である。中央の御殿の出座敷に祈禱の壇が設けられてあ
つて更衣は北側の座敷を病室にして居たから宮は西向の方の座敷に
おいでになつた。もののけが宮のお身體にもついてはいけなさと云
つて更衣は留めたのであつたが宮は離れるのを悲しくお思ひになつ
て一緒に山莊へ来ておいでになるのである。客を入れる處が外にな
いので女達は宮のお座敷と御簾だけが隔てになつて居る處へ夕霧の
君を通した。

「こんなに行き届いた御親切に逢つて居ましてこの儘死にましては
お禮も申し上げられないと思ひますから氣を引き立てゝ癒つて見

ようと思ひます。」

と更衣は取次いで云はせた。

「此方へお出でになる時には是非お供をしたいと思つて居ましたのですが、あやにくその日は六條院の御用があつたものですから失禮をいたしました。それから何やかやと出にくいことがありまして濟まないと思ひながら今日まで参ることが出来ませんでした。」
なご、夕霧の君は云つて居た。宮は奥の方においでになるのであるが、小さい間のことであるから柔らかに身じろぎをされる衣の音などもする。宮が此處においでになるのであらうと思ふと夕霧の君は魂も身に添はないやうに思つて、更衣と取次ぎで話をして居るその合間に少將やその外の女達を前に置いて、

「私が宮様を戀しくお思ひして伺ふやうになつてからもうごだけ月日が経つとあなた達は思ふ。それにまだ宮様とは人傳でなくて

はお話も伺へない。餘りあぢきない戀だと思ふ。あなた達も笑つて居るのだらう。」

と夕霧の君は云つて居た。女達は自身等でいいかげんなことが云つて居られないやうに思つて宮に何か御挨拶をされるやうにごお勧めした。

「見舞つて下さいました本人がお逢ひ出来ませんやうな濟まないことですから私が代つてお話を伺ひたいのですが、この間うちから悪い容體を見て心配をしたものですから何だか自分も病人のやうになつて居りますので失禮をいたします。」

「宮様のお言葉なの。」

少將にかう云つて夕霧の君は居すまひを正した。

「私は更衣さんの御病氣を自身のことのやうにして歎いて居りますのも、あなたがその御心配のためにお身體を悪く遊ばさないかと思

ふからです。無暗に取越し苦勞を遊ばしても仕方がありませんから、お癒りになりますまでお氣を緩りとお持ちになつて、御病氣を遊ばさないやうになさなくてはいけません。御病人もその方をどんなにお喜びになるか知れません。更衣さんの御病氣にはそんなにお思ひになつて私のお慕ひして居る死ぬやうな思ひには冷淡でいらつしやるのはお恨めしいやうに思ひます。』

夕霧の君は云つた。それを取次いだ少將も、

「眞實にさうで御座いますよ。」

と云ひ足した。夕方に近づいて霧が降つて來た。山陰であるから薄暗くて頻りに日ぐらしが啼く。垣根の處に咲いて居る撫子が風になびいて艶めかしい色を作つて居る。涼いやうな水の音と凄いやうな山おろしの風の音がある。經を讀む僧の更代の時の鐘が鳴つて、後の人と前の人との經音が一時一緒になつて起るのが尊く聞える。所が

そのもの哀れさが身に沁んで夕霧の君は歸りたくない氣がするのであつた。律師も別に陀羅尼を讀んで居る。今晚は更衣が餘程苦しさうである。と云つて女達は大方その方に集つて附いて居た。宮のお傍には極くわづかの人より居なかつた。戀を語るのに好い静かな時である。夕霧の君は思つて居た。霧が直ぐこの軒の處まで這つて來た。山里の哀れを添ふる夕霧にいで行くそらもなきこゝちする

と云ふ歌を夕霧の君は云つた。

一つ家の籬をこめて立つ霧も心おちぬ人はとゞめず
かう口ずさみにお云ひになる宮のお聲が聞える。夕霧の君は嬉しく思つた。

「どうすれば私は好いか、歸るにも歸られず此處では歸れとお云ひになるのだから。」

などと獨言を云つて居た。夕霧の君はまた長い間の片戀の辛さをし

みじみと語るのであつた。宮もお知りにならないことではないのであるが、今迄は氣附かない風を作つて居られたのであるから、その人の打ち出して語るのを聞きになつては答のしやうに困つて苦しく思つておいでになつた。こんな好い機會はまたとないことであらうから、少しは宮に押し附けがましいとお思はれしても好い、思ふだけのことは遂げることの出来なくとも、この戀をせめてよくお知せたいとかう思つて、座を一寸立つた夕霧の君は家來を呼んで、

「××律師に是非逢はなければならぬことがあるのだが、今は更衣さんの祈禱で手が一寸空かないやうだから、今夜私は此處で泊ることにして、夜明に律師の宿へ歸つて居る時に行つて逢はうと思ふ。おまへ達だけは此處に居て下の男達は栗栖野の地所預へでも行つて泊れと云つてくれ、此處に大勢居るとつたらん付度をする者があるといけないから。」

と云つた。理由のあることであらうと思つた家來は承知して彼方へ行つた。

「霧で道が見えないやうですから、この邊で今夜は泊つて行かうと思ひます。願へることなら此處でこのまゝ置いて頂きたいのです。律師の用事の済む時まで、好いのです。」

と夕霧の君は少將に云つた。何時もはこんな長居をする人でないのにお思ひになつて宮は困つたことになつたとお思ひになるのであつたが、立つて外の間へ行くのは態どらしい、軽々しいことであるとお思ひになつて唯音も立てぬやうにして静かにそのまゝおいでになつた。戀の言葉を盡して宮をお動ししようとして居た夕霧の君は、次の女の奥へ行かうとするのに隨つて御簾の中へ入つた。まだ夜になつたと云ふのではなく、深い霧のために家の内が暗くなつて居る頃である。少將は驚いて度を失つて居た。宮ははつとお思ひになつた

のと一緒に、北の襖子の外へ出ようと言われたのであつたが、夕霧の君は直ぐ見附けてお着物の端を手で押へて留めた。宮のお身体は隣の間へおいでになつたが、お着物の裾はこの間に残つて居た。襖子は此方に掛金があつて彼方にはないのであるから閉めても何のかひもない。宮は水のやうに冷くなつて慄へておいでになつた。さうではあるがあらあらしく男の手を引き離さうとはすることもお出来にならない。「こんな心とは少しも存じませんでした。」

(874)

「かうして私がお傍へ来るのが理のないとんきようなことなんですか。私のやうなものです。が戀しいとお思ひする心をお見せしやうとして居た月日は随分長いものでつたのです。」

夕霧の君は云つて、それから宮のお言葉を促すやうなことをいろいろと云つた。宮は侮られたと云ふお怒りもお覺えになるのであるか

ら夕霧の君の望むやうなお答はされる理由もない。

「餘り少女らしくお恐れになる。戀をして居ると云ふだけの罪はあつても、それ以上のことを犯さうと思つて居るのぢやありません。どんなに私はこの戀で心を碎いて居ますか。いかに知らず顔をしておいでになつても、あなただつてこれまで幾分それは知つておいでになる筈です。私の戀は許されないと私は憎い者だとあなたはと思ひになるにもせよ、私はこれをお打ち明けしないで居られますか、ねえ、さうお思ひになつてかうした行は許して下さい。」

夕霧の君は云つた。宮は襖子を手で押へておいでになつた。

「この襖子位で何が塞きとめられると思つておいでになるのですか。」と云つて夕霧の君は笑つて居た。さうではあるが夕霧の君は男と云ふ強身で戀に勝ち誇らうとはしなかつた。宮は飽く迄なつかしい品の好いなまめかしさを持つておいでになる方で、物思ひを絶えずされ

(875)

るせいで、瘦せて細りとしたお姿も、なよ／＼とした着物の袖も、薫きしめた香の匂ひも、總てが愛すべき柔い氣分に包まれたやうにお見えになるのであつた。夜が更けるに随つて風の音も高くなる。蟲の聲も鹿の鳴く聲も、瀧の音も一つになつて、淡い悲哀が感じられる夜である。戸もそのまゝ開いて居た。西に傾いた月が哀れな光を放つて居た。

「私は善人になり過ぎて居るやうです、ね、けれどあなたが残りの冷かにおしになると、私は却て心が押へ切れなくなるかも知れません。あなたには男の心が察し得られない方でもないのに。」

なご、夕霧の君に責められて、何と云つたら好いかと宮は惑うておいでになつて、處女ではおありにならないからと云ふやうなことが、いちよいはのめかされるのを、宮は堪へ難い侮辱を受けるやうにお思ひになるのである。

現身は觸穢の人とあなごられわれあまつさへうき名負ふらむ

と宮は云ふともなく口からお漏しになつた。自身は云つたことはさう思へば悪くもとられることであるなごと思つて、夕霧の君は微笑みながら、

「濡衣をお着になるより眞實のことにしてしまつたら好いではありませんか、そのお心になつて下さい。」

と云つて、夕霧の君は月の光の明く射す縁の近くへ一絡にお出でになるやうに宮をお誘ひするのであつた。心強くはしておいでになつても、孱弱い宮は男に引き寄せられておいでになつた。

「私を疑はないで安心して居て下さいな。私はあなたの許しをお受けしないので、どうしようとも思ふのぢやありません。」

と夕霧の君は云つて居た。もう程なく夜が明けると思はれる頃である。霧を通して、明い月の射し込むのであるから、顔を見られないやうに見られないやうに、とおしになる宮の御様子、が云ひやうもなく、艶で

ある。夕霧の君は柏木の君のことも少しは云つて静かに話をして居ようとするのであつた。柏木の君より自身を劣つた者のやうに思はれて居るのが残念でならないと云ふやうな口吻も交らないではなかつた。柏木の君は位なども高くはなかつたがそれは院のお許しになつた良人と思つて添つて居た。そしてその時の自分は男の心の表面ばかりの愛に寒い思ひをしたのである。柏木の君の妹の婿である夕霧の君と再婚したと云ふやうな事が傳はつたなら太政大臣家では自分を何と云ふであらう。世間から謗りを受けることでもあらうし、院もごんなに情なくお思ひになるか知れない、こんな苦勞を負ひながらまた寒い男の愛に身を置かうとは思はないと宮はお思ひになるのであつた。母の更衣が知らない間に此處までもう事を進ませたのも罪であるやうに詫しくお思ひになるのである。

「夜の明けないうちにもうお歸りなさいな。」

と宮はお云ひになるより外はないのであつた。

「あさましく悲しくなります。朝歸る男が戀を遂げることの出来なかつた男とは草や木でも思はないでせう。それでも私は忍びますから私の心持に眞實に同情して下さい。賺して歸したとお思ひになつてはいけませんよ。」

と夕霧の君は云ふのであつた。お逢ひしてますます戀しさの募る宮と清くお別れして行かうとするのは夕霧の君にはどれ程の苦痛か知れないのである。

「濡衣だけはごうしてもお着にならなければなりませんよ。」

「あなたがお着せになるの、ひどいこと。」

と宮は強い風を見せてお云ひになつた。夕霧の君は六條院の花散里の君の御殿へ寄つて其處で着物を着更へたり朝飯を食べたりした。夕霧の君の手紙は來たが宮は見ようともされない。昨夜のことをい

ろいろに想像して居る女達は、これに書いてあることでありなしが分るであらうなごとも思つて居た。

「お返事を遊ばさないのは餘りお悪う御座いますよ。まあお読み遊ばせよ。」

と云つて廣げた者があつた。

「顔を男に見られたのだと思ふと、私は何とも云ひやうのない氣がする。私の心が足りなかつたのだとは思ふがね。大將は好意のある人とは思へない。手紙は讀まないと思ふに云つておやり。」

と少將に宮はお云ひになつて、その儘横に寝ておしまひになつた。

魂を君が傍へに残しこしむくろは唯に涙のみする。

こんな歌などが手紙には書いてあるのである。長いのであるが女達は見ぬやうにして讀んで居た。まだ遂げられない戀を歎いてあるのは分るのであつたが、まだ疑ひを持つて不思議に思ふ人もあつた。

更衣はものので煩つて居る病人のつねで昨日とは全く違つたやうに今日は氣分が好いやうであつた。今迄陀羅尼を讀んで居た律師が不意に、

「左大將は何時頃から宮様と關係をされたのですか。」と云つた。

「そんな事はありませんよ。大納言と仲の好い友人だつたものですから亡くなつてからも私達に親切にして下さるものですからお心やすくして居るだけで私が悪いのをお聞きになつて態々此處まで昨日は来て下すつたのです。」

と更衣は云つた。

「駄目、駄目、私にお隠しにならないでもいい。今朝夜明に私が此處へ來る時に、宮様のお座敷の戸を開けて出て來る美くしい男があつたが霧が降つて居る時だから私の目には誰とも見分けがつかなかつ

たが弟子どもが左大将のお歸りだ、昨夜も車を返してお泊りになるのを見たなどと口々に云つてました。然しよくない事ですなあ。私はお祖母さんに當る宮様のお頼みであの大將の小さい時からよく祈禱をして上げましたからよく知つて居ますがな、立派な人には相違ないが奥様が威張つて居ますからなあ、子供も七八人あるですよ、競争しても到底宮さんがお勝ちになることは出来まい。厭なことです。厭なことだ。女人は皆そんなことから罪をわれから作るのです。」と律師は首を振り振りかう云ふのであつた。

「私が丁度昨日あの頃は悪かつたものですから逢ふのに暫く待つて見ようと云つて休息をして居られると女達が云つて居ましたが、夜道になつたのでお泊りになつたのかも知れませんが決してそんなわけぢやないのです。」

と更衣は云ひながら心の中ではそんな事があつたかも知れない、思ひ

當るやうな素振は時々見えないでもなかつたが眞面目がつて居るのであるから宮も油断をおしになつて居た處へ不意に入つてでも行つたのであらうかと思つて居た。律師の歸つた跡で少將を呼んで實否を更衣は聞くのであつた。

「何故私に今迄黙つて居たの、そんなことはまさか眞實とも思はないけれどさう云ふふうにとられるやうな事でもあつたにはあつたのぢやないか。」

更衣は相手の様子を窺ふやうにしてかう云つた。少將は云ふのは宮にお氣の毒なことであると思ひながら昨日のことを初めからくはしく話した。今朝の手紙の文章と云ひ宮がお話と云ひ身體の上の關係が作られたのではないと云ふことを口を極めて辯疏するのであつた。

「大將は長い間思つていらつしつたことを唯直接にお話したいとお

思ひになつたので御座いませう。どんなことを申し上げた人があ
るかも知りませんけれど。」

と少將は云つた。律師とは知らないで誰か女達の中の一人が告げた
のだと少將は思つて居るのである。望んで居たやうにその話が嘘で
なかつたのであるから更衣は口惜しさに涙をほろ／＼と零した。少
將は更衣の病氣に障らないかと思つて、何故眞實のことを云つてしま
つたのであるかと後悔した。

「襖子を閉めてあつたので御座います、確かに。」

などと好いやうに云ひ更へやうとするのであるが、とてもかくても其
處まで男を近寄せたからは何にかかはらず宮のお名は穢れてしまふ
律師の弟子達はきつともう話を大きくして云ひ觸らして居るに違ひ
ないと更衣は思ふのである。附いて居るものが確りして居ないから
と云ひたく思つたがさうとも口へは出せなかつた。

「少し今日は好いのだから、宮様にこんな時にお話に来て下さるやう
に申し上げておくれ。參るのだけれど動けさうにない。二日程も

お逢ひしないと千年もお別れして居る氣がする。」

と更衣は涙を溜めながら云つた。少將は宮においでになるやうにと
云ふことだけを申し上げた。行かうとおしになつて涙で固まつた額
髪をお直しになつたり、綻んだ單衣の下着を着換へたりおしになつて
も宮は足がお出にならないのであつた。溜息をおつきになつてまた
宮はお座りになつた。

「氣分が悪くてならない。私はいつそこの儘死にたい。逆上せて居
るのだから足を撫でて貰つてから伺はう。」

とお云ひになつて、少將に介抱されておいでになつた。

「昨夜の大将様のことを誰か彼方へお告げした人が御座いますよ。

私にお尋ねになりましたから、ありの儘にお話いたしました。が襖子

はお立てになつた儘でしたとそれだけは少し繕つて申して來たので御座いますから、お尋ねになりましたらそのお積りでね。」

と少將は云つた。更衣が歎いて居たことなどは云はないのである。それだから呼ばれるのであらうと宮はお思ひになつた。枕から半がおちて居た。夕方にまたお迎へが來たので真中の座敷藏の戸を開けさせて、其處を通つて北の座敷へ宮はおいでになつた。病氣で居ても更衣は身を起して敬しく宮をお迎へするのであつた。

「二三日お目に懸れませんでしたね。何故こんなに戀しくお思ひするのでせう。死んだらどうするのでせう。親子は一世の縁と云ひますもの、もう廻り合ふことが出來ないのですもの。」

と云つて更衣は泣いた。宮も悲しいことが積り積りして居たのであるから、何も云はずにお泣きになるばかりであつた。柔順しい内氣な方であるから自身の證りを立てるために云ひ譯などのお出來になる

筈もない。更衣は哀れにお思ひして昨夜のことは云ひ出さないのである。灯を點させて此處へ宮のお夕飯を運ばせて、更衣が手づから膳の上を直したりして宮にお勧めするのであつたが宮は箸を取らうともされぬ。唯更衣の病氣の少し好いやうなのお知りになつた。夕霧の君から文の使が來た。何も知らない女がそれを受け取つて、

「左大將様から少將さんにお手紙がまわりましたよ。」

と大きい聲で云つた。先刻から氣を揉んで居た少將はまたこれにはつと思つて、急いで手紙を取つた。

「どんなお手紙が來て。」

と更衣は尋ねた。更衣は今になつては宮を夕霧の君と結婚させておしまひした方が好いかも知れぬと云ふ弱い心にもなつて、二日目の今夜は必ず來る筈の人を見て、その志の深さにせめて安心を得ようとも

思つて居たのであつたが手紙の様子では夕霧の君は来さうにない。
落膽をしながら、

「返事をお上げ遊ばせね。もう立てられた名はどんなにあなたが清
いお心でいらつしても云ひ直してくれる人はありませんから、今
ではあの人から見捨てられないやうにするより仕方がないのです
よ。」

と云つた。宮はお書きにならない。更衣は苦しがりながら筆を取つ
て、

女二の宮は私の病の頼もしげなくなりしを見給はんため此方にお
はします程に候。御かへしそそのかしまつれど聞えがたげにさる
るにて候へば代りて私より文いたし候。

女郎花しをるゝ野邊を何處とて一夜ばかりの宿を借りけん
今は永久の日を祈られ候を。

かう書いて使に渡すやうに巻いて其處へ出した。夕霧の君は晝過か
ら三條の家へ歸つて来て居たのである。今夜行くことは關係のあつ
た人らしく思はれることだと思つて戀しい心を押へて居た。雲井の
雁の君は夕霧の君の泊つた理由も察して居ないのでない妬しく思
ひながら素知らぬ振をして子供等を前で遊ばせたりなごして居た。
夜の十時頃に小野へ行つた使が返事を持つて来たのであるが、重い病
人の書いたものであるから字がしごろでよく讀めさうにない。灯の
近くへ寄つて眉の根を寄せながらよく見ようとして居る時、遠い處か
らそれを見附けた雲井の雁の君が傍へ来て奪つた。

「何をするのだ。怪しからん。六條の東のお母様の手紙ぢやないか。
今朝風を引いて寝ておいでになつたやうだつたが、院の御前で御用
をしてその儘歸つたから濟まないと思つて尋ねに上げた手紙の返
事ぢやないか。讀んで御覽よ。戀の手紙なものか。何故あなたは

そんなはしたないことをするの、長く添つて行くに随つてますく
あなたは私を侮るのね。」

歎息をするやうに夕霧の君は云つて、それを取らうともしないので
拍子抜けがしたやうな氣味もあつて、雲井の雁の君は中を見ないのでそ
の儘持つて居た。

「年月が経つに随つて私を侮るのなら、それはあなたの眞似ですわ。」
恐い顔をして居る良人に少し甘へるやうに雲井の雁の君は云つた。
夕霧の君は笑つて、

「それは何方が先生でもいいさ。然しねこんなに武装して妻一人を
守つて居るやうな男を良人にして居るのは眞實はあなたも面白く
ないことだ。もうこんな事は二人とも止めて新生涯に入らうぢや
ないか。何人もある戀人の中に出抜けた愛を贏ち得る人と云ふ目
ざましい者になる氣はないかねえ。」

と夕霧の君は云つた。機嫌をよくさせて騙して手紙を取り返さうと
思つて居るのである。

「新生涯をお作り遊ばすのに私のやうな古い妻はいらないことです
わ。今になつてそんな苦痛が出来るものですか。今までに習慣を
つけて置いて下さらないで。」

と恨めしさうに雲井の雁の君は云つた。隠された手紙は更衣の書い
た字に違ひないが、何と云つて來たのであらうと思つて、夕霧の君はそ
の晩は少しも眠れなかつた。妻の寢て居る間に夕霧の君はそつと起
きて、隠した處と思ふ處を捜すのであつたが見附けることが出来な
かつた。朝になつて子供に呼ばれて雲井の雁の君は床を出た。雲井の
雁の君は良人が見たがらない手紙であるから、昨日のはやつぱり戀の
手紙ではないと思つて居た。そのうちには子供のことで紛れてそれ
も忘れてしまつた。前夜の返事を知らないではまた手紙が送れない

と思つて夕霧の君は焦慮して居るのである。午後になつてから、「今日は気分が悪くて六條へ行かれないから手紙でまた見舞つて置かうと思ふが、昨夜のはどんなことが書いてあつたのかね。」と夕霧の君は云つた。

「叡山の麓で泊つた晩に風を引いたのですと御自分のことを云つて断つておおき遊ばせよ。」

と雲井の雁の君は云つた。隠した手紙のことはきまりが悪いので何とも云はないのである。

「そんなことを云ふのがあなたは面白いの女達に馬鹿にされるよ。」などと夕霧の君は云つて、また、

「眞實にどうしたのだ、昨日の手紙は。」

と云つたが雲井の雁の君は出さうともしなかつた。そのうちに日が暮れかゝつて来た。山蔭の家は霧でもう餘程暗くなつて居るであら

うと思ふと戀しくてならない。硯の墨を摩つて昨夜のを見たやうな顔で手紙を書く工夫はなびかなごと考へて居た時に、ふと敷物の端が少し高くなつて居るのに気が附いた。上げて見ると其處から昨夜の手紙が出て来た。もう結婚をしたものと認めてこの手紙を書く迄に更衣は定めし苦悶をしたであらう、それに昨夜も行かず今日も今まで手紙を出さないのだから、どんなに悲しんで居るか知れないとさう思ふと夕霧の君は泣きたいやうな心になつた。妻が憎い。それもその我儘をさせる癖は自分が附けたのであると思ふと、自身のことささまざまに恨めしく思はれる。道は遠し行つても宮は快くお逢ひにはならないであらうし、また雲井の雁の君がうるさく妬むことであらうと思ふと、小野へ直ぐ行かうと思ふ心も押へなければならぬやうに思はれた。よく走る馬に使を乗せて夕霧の君は手紙を持せてやつた。大將は昨夜から六條院に居つたと使が口で云ふやうにさせてあ

つた。愛情の試みと云はれる新婚の二日目に来ず、三日目も朝から手紙の来ないのを見て、煩悶を重ねて一層病を重くして居た。更衣は三日の夜に、

『左大將のお文。』

と云ふ聲を聞いて、また今夜も来ないのであらうと落膽して、それならば許したやうなあんな手紙は書くのではなかつたと甚しく悔んだ儘歸らぬ人になつてしまつた。宮は生きて居ようとはお思ひにならなると云ふやうに、更衣の死骸に取り附いて長い間泣いておいでになつた。

『もういたしかたがないので御座いますから、お泣き遊ばさすにもう彼方へおいで遊ばせ。お薨れになつた方のためには却てそれはいけないので御座いますよ。』

などと女達は云ふのであつたが、宮は其處へ身體が凍んで動すことも

お出来にならないやうであつた。更衣の死んだのを聞いて驚きながら夕霧の君は吊問の手紙を書いた。六條院からも前關白家からも使が来た。朱雀院のお手紙だけは宮は泣きながらお讀みになつた。更衣の甥の大和守が葬式の世話をして居た。まだ遺骸が棺に納められないうちに夕霧の君は来た。大和守が泣く泣く出て来て吊問の禮を云ふのであつた。宮は夕霧の君についての煩悶が更衣の死を早くさせたのであると云ふ恨みを持つておいでになつて、取次いで来た夕霧の君の言葉に返事をしようとはされない。

『どう申しませう。あれ程の方が態々いらつして下すつたのでは御座いませんか、何とかお云ひ遊ばさないのは餘りで御座いますよ。』と少將は云つた。

『いいやうに云つて置いておくれ。私はこんなものだからそんなことも考へられない。』

と云つて宮は横になつておしまひになつた。それもお道理であると思つて少將は、

「宮様もお死になつた方のやうになつていらつしやいます。お越し下さいましたことは申し上げました。」

と夕霧の君に云つた。この人も涙に咽せながら物を云つて居るのである。

「何故かう急にお薨りになつたのだらうか。」

と夕霧の君が云つたので少將は更衣の最後に悶えて居た様子を少し話すのであつた。夕霧の君はこの近くに自身の持つて居る領地から手傳ひの者を大勢遣すやうに計ひなごして歸つた。山おろしが凄じい音を立てる九月になつた。夕霧の君は毎日のやうに見舞の手紙を送つて来た。念佛の僧に與へる物までもいろ／＼と心附けて持たせて來させるのであつた。宮は更衣を間接に殺した人のやうに夕霧の

君をお思ひになつて手紙を手にとつて見るだけでも不孝に當るやうな氣がおしになるやうであつた。もう日數も経つたのであるから、さう何日までも歎きに囚はれておいでになつて、これ程盡して居る夕霧の君に返事も書れないのはお宜しくないと思つて宮をお諫めする人もあつた。大やうな心の雲井の雁の君は強い嫉妬をしながら夕霧の君の戀の相手は亡くなつた更衣であつたのか女二の宮であるのかはよく知らないのであつた宮かとも思ふのであるが手紙を書き替して居た人は更衣であると思ふと、この頃物思ひ顔をばかりして居る良人は更衣の死を歎いて居るのかとも思ふのであつた。夕方の空を眺めて縁に近い處で横になつて居る良人に、

哀れをもちかに知りてか慰めんあるや戀しきなきやかなしき
と書いた紙を若様に持たせてやつた。

誰もそのうちに死ぬ時があると思ふから死んだ人のこともこの世

に居る人のことも總て悲しい。
と書いて夕霧の君は返した。近い將來に實現されることと思ふのであるから夕霧の君は女二の宮について妻が推測して云ふことには餘り云ひ譯らしいことはもう云はなかつた。宮はどんな決心をして居られても自分は更衣の許した手紙を持つて居るのであるから必ず宮をお娶りしないでは置かないと夕霧の君は思つて居るのである。九月の十幾日に夕霧の君は小野へ行つた。山おろしに木の葉が傷ましい程散る日である。山莊は經の聲が幽かにして念佛だけは幾人もの聲で唱へられて居た。垣の處に鹿が來て立つて居る。瀧の音は物思ひのある人に一層悲しがるやうな聲を立てて居た。家の中が寂しい。美しくしい直衣を着て夕日を扇で除けて居る夕霧の君の手が白かつた。少將を呼んだ。黒い几帳から出て來た人も色の濃い喪服を着て居る。この少將は大和守の妹で更衣には姪に當るのである。

「宮様の冷いお心は云ひやうもない。お恨みのしようもない。逢ふ人ごとにどうかして居るだらうと私は尋ねられるよ。ぼんやりとして居るからさう見えるのだね。」
などと夕霧の君は云つてそれから更衣が最終に書いた手紙のことも云つて終ひには泣いて居た。取次の女が度々夕霧の君の言葉を持つて來るのであつたが宮は、
「唯今悲しさで騒いで居りますこの心持が少し静まりましたらいろいろと御親切にして下さいますあなたのお禮も云はうと思つて居ます。」
とお云はせになつただけであつた。歸り途に一條の家の後を通つて西北の塚の崩れた處から中を覗いて夕霧の君はまた限らない悲哀を感じた。雲井の雁の君は此頃はまたしても良人に六條院の紫の君や花散里の君を例に引いて多くの中の一人の妻として安心を得て居る

女を見習へど云はれるのを苦しく思つて居た。唯一の妻として愛された來し方は親や兄弟にも幸を祝はれたのに、今日になつてあましい片陰の身になつてはその人等に合せる顔もないと思ふのである。打ち解けることもなくなつて、この夫婦は一人一人別々の物思ひをして夜を明すことも多くなつた。行つた翌日宮へお書きした手紙は例のやうに返事はないのであつたが宮のお手習ひのやうにお書きになつた反古を一枚拾つたから差し上げると云つて少將が送つて來た。

それには、

朝夕に泣く音を立つる小野山は絶えぬ涙やおとなしの瀧と云ふ歌が書いてあつた。古い詩の悲しいものなども書き交せてある。美しくいとお字である。見て居て魂が消えるやうに夕霧の君は思つて居た。戀をして居る人を第三者として見て居た時、どんなにそれが馬鹿げて思はれたであらう、自分のことになつて初めて戀の苦の堪

へ難いことも知つたなどとも夕霧の君は思つて居た。源氏の君もこの噂をお聞きになつた。夕霧の君が真面目な人であるのを御自身の昔の不名譽を取りかへす子として喜んでおいでになつたのが困つたことになつて來たと思つておいでになつた。これも少し驅け離れた人ならば兎も角、女二の宮と戀をするのは舅の前關白などに對しても濟ぬことではないかと源氏の君はお思ひになるのである。然し結局二人の女が氣の毒であるとも思つておいでになつた。御自身の死後夕霧の君がまた紫の君を戀するやうなこともあるかと云ふ不安もお感じになるのであつた。そんなことをお云ひになるのを聞いて紫の君は顔を赤めて、

「私をそんなに跡へお残しになるお積りなの。」

と恨めしさうに云つて居た。源氏の君は夕霧の君の來た時心を試さうとお思ひになつて、

一條の更衣の四十九日はもう済んだのだらうね。日の経つのは早いものだ。私が出家をしたいと思ふやうになつてからももうかれこれ三十年は経つ。」

こんなことをお云ひになつた。

「出家をしても宜しいやうに傍で思ふ者さへもなかなかないのですから。」

なご、夕霧の君は云つてそれから。

「一條の更衣さんの七日七日の佛事などは世話するものが大和守一人なんですから氣の毒でなりません。身うちの少い者は氣の毒です。」

と云つた。

「朱雀院からお世話はされるだらう。女二の宮は實際悲しんでおいでになるだらう。前に聞いて居たのよりも近年になつて私はあ

の更衣が耻しくない女だと云ふことが分つたのだつた。惜しいもんだね。女二の宮は此處の宮の次の院の御愛子だと云ふことだが、美しくい方だらうね。どう云ふ御性質の方かね。」

「さあ更衣さんは唯平凡な女だつたと思ひますがね。」
と夕霧の君は云つた。それ程噂を立てられて居る宮のことを知らず顔をするやうな氣強いこの心で思ひ込んだのであるから諫めて見てもかひがあるまいと源氏の君はお思ひになるのであつた。女二の宮はこの儘尼になつて小野に居たいとお思ひになるのであつたが、さうと申し上げた人があつたので朱雀院から、

自分が出家したのに續いて女三の宮が尼になり、またあなたがさうなると云ふのは構はないことではあるが、世間で自分等親子は呪はれて居ると云ふ評を立てられることにもなる。悲しいことに逢つたと云つても直ぐその場合に尼になるのは却て心の弱さを人に見

られるやうで耻しいことでもある。よく心を静めることが出来てから考へて見てさうなることも暫くは延した方が好いと思ふ。こんなお手紙が来た。夕霧の君と關係がお出来になつたと云ふ噂も院はお聞きになつたのであつて男の愛が浅いために尼になつたと云ふやうに世間で思はれてはならないとお考へになつたのであつた。宮が耻しくお思ひになるであらうとお思ひになつてその事は少しも院はお云ひにならないのである。夕霧の君は宮のお心の動くのを待つて居ては果てもないことであるから世間へは更衣の許したことで思はせて強壓的の結婚をするより外はないと思ふのであつた。一條の家へ宮をお迎へする日を夕霧の君は決めて家の修繕をさせて内部の裝飾なども皆新しくしつらへてその日は自身が先に來て居て新婦の宮をお待ちして居た。宮はどうしても山莊を出ないとお云ひになるのである。

そんなことを仰つしやつても私は存じません。私はもう大和の方へ行かなければならないのですからさう何時迄御用をして居ることも出来ないのです。その跡は誰がお世話を申し上げますか。宮様方でも再婚をされる方は昔からのちやありません。あなたお一人が非難をお受けになる理由もないのです。何と云つても左大將と御結婚を遊ばすのがあなたの萬全の策で御座います。」と大和守は云つた。そしてまた左近や少將に「あなた方が悪い。宮様によく道理をお説きしないことがありますか。」と云つて責めた。新しいお召物を女達が寄つてお着更へさすのを宮は疎ましく思つておいでになつた。白いお手で前へ引き寄せて御覧になるお髪が六尺程の長さがある。少しお減りになつたやうではあるが見事に思つて人は見るのであるのに宮は何と云ふ衰へやうであ

らうとお思ひになつて、こんな人が男に愛されようとは思へないことであるとお思ひになつて溜息をついてまた横におなりになるのであつた。

「彼方でお決めたになつた時間が違つてまゐりますわね。どうしませう、夜分にもなるし。」

なご、云つて女達は騒いで居た。時雨がさつと悲しく降つて来た。のぼりにし空の煙に立ちまじり思はぬ方になびかすもがな。こんな歌を獨言のやうに云つて宮は泣いておいでになつた。宮が手づから髪をお切りになるやうなことがあつては悪いと云つて、この頃は缺なごが皆隠されてあるのである。女達は急いで宮のお手廻りも自身達の荷物ももう運ばしてしまつたのであるから、一人お残りになることも出来ないで宮は泣く泣く車にお乗りになつた。此處へ来た時更衣は苦しい身體をして居ながら降る時には自分の髪を撫でて繕

つたりしてくれたのであつた。なご宮はお思ひ出しになつて悲しがつておいでになつた。守刀と経箱が宮のお傍へ来た。まだ黒塗の経箱が出来ないので、假に更衣の持て居た螺鈿の手箱がそれにされて居るのである。一條へ着いた時、宮はまた車から降りるのを厭だとお云ひになつた。夕霧の君は東御殿の南向き一體の座敷を居間やら自身の使ふ方にしてもう主人らしくして居た。三條の家の人等は、今更のやうにこの有様に驚いて歎いて居た。眞面目な人の愛にはよくこんな思ひ懸けない波瀾を起すことがあるやうである。世間では以前からあつた關係が今公然に發表されたと云ふ位に思つて居た。宮のお心がまだ打ち解け難いものであると云ふことは誰も思つて居るものはない。宮はまだ精進をしておいでになるのであるから、膳の上などが新婚の祝のやうでもない。女達も皆部屋へ下つて寝た頃に夕霧の君が此方へ来た。宮の御寢所へ案内をさせようと夕霧の君は少將を

責めて居た。

「まあ今日昨日は宮様をお一人でお置き遊ばせ。お歸りになるごまた悲しみが新になるので御座いますものね。お泣きになつて死んだ人のやうに疲れてお寝みで御座いますよ。」

「そんなことはもう聞かない。私のことはちつとも思つてくれない人だ。おまへは。」

「でも同情よりも自分の身が苦しいので御座います。宮様にお怒られして。」

と少將は云ふ。宮様も自分も決して世間の非難を受ける理由はないのだからなご、繰り返して夕霧の君は云ふのであつた。

「さうで御座いますね、自分だけね、今日明日だけね、殿様。」

と少將は兩手を擦りながら云ふのであつたが、今は客ではない主人の命令なのであるから、少將は引き立てられるやうにして夕霧の君に隨

いて行つた。此處であらうと思ふ宮の御寢所へ夕霧の君は入つたが宮はその前から座敷藏の中に夜具を敷かせて戸をさして寢ておいでになつたのである。これも何日迄も隔てにならうと宮はさうしておいでになりながら行手の道を思つて味氣ながつておいでになつた。夕霧の君はこれ位にされる位で諦めを附ける自分の戀でないなどと思つて口惜しがつてあせる一方ではまた平氣にもなつて居られるのであつた。一人で夕霧の君は宮の御寢所に寢て居るのである。翌朝夕霧の君は六條院へ行つた。花散里の君が、

「女二の宮様とまた御結婚を遊ばしたと云ふ噂を聞きましたが、眞實のこと。」

と大やうに尋ねた。

「人はさうも云ふでせうよ。亡くなられた更衣が初め宮をお迎へしたいと云つた頃には不服なやうでしたが、死ぬ時になつて氣が變り

ましてね是非さうして宮のお身をお堅めさせたいと彼方から頼まれたのです。私も戀しく思つて居た方なものですからいよいよお引き取りしたのですよ。いろんな評は立てられることだらうと私は覺悟をして居ますよ。」

夕霧の君は云つて笑つてまた

「然し宮様はごうしてもやつぱり厄になるのだと云つて居られるのですよ。まだ結婚をしたと云つても表面だけです。遺言を重じて私はさうして居るだけです。院が此方へいらつした時あなたからよくこの事情を申し上げて置いて下さい。私からお話をしようと思つても云ひにくいのですから。」

と云つた。

「それではやつぱり眞實ね。あなた位の方が奥様をお二人お持ちになるのは當然のことですけれど三條の姫様のお心が可愛さうね今

迄あなたの唯一の奥様でいらつしたのに。」

「姫様なご、仰つしやると可愛らしさうですね。鬼のやうな女ですよ。けれど私は何もあの妻を顧みないなど、云ふ事は將來においても斷じてありませんよ。失禮ですけれどあなたのやうな心になつて居てくれれば好いのですよ。私は女王さんやあなたのお心掛

けを女の手本だと思つて居ます。」

と賞めた。花散里の君は笑つて、

「手本だと云はれる程私は哀れな妻なんですわね。院が御自身のこととは棚へ上げてお置きになつて、あなたのことを何かと頻りにお云ひになるのはをかしくつてね。」

と云つた。

「全くさうですよ。」

かう云つて夕霧の君は仲の善い繼母と二人でそのことを飽く迄をか

しがつた。源氏の君は出て来た夕霧の君を見て女二の宮のことは何ともお云ひにならなかつた。美くしい男の盛りで匂ひが邊りに散るやうな我子をお見になつてこの人を女が戀しがらすには居られまい自身も心騒りがしないではあられまいなどお思ひになるのであつた。晝頃に三條の家へ夕霧の君は歸つて来た。若様達が直ぐ見附けて傍へ来てまつはるのである。雲井の雁の君は几帳の中で寝て居た。夕霧の君が入つて行つても知らぬ顔をして居るのである。からだの上に着けた着物をとると、

「何故此處へいらつしたの、私はもう死んだのですよ。鬼だどよく私のことを仰つしやるから眞實に鬼になるのです。」と云つた。

「さうさ、あなたの心は鬼だよ。けれど顔はそんなに恐くないからね、私は厭にならないよ。」

「美くしい方同志の戀をしていらつしやるそんな中へ私が変わるものでもなし、私は眞實に何處かへ行つてしまひます。今迄そんな心の方と一緒に居たと云ふだけでもくやしい。」

と云つて雲井の雁の君は起き上つた。赤めた顔に愛敬があつて美くしい。

「つまらないことでも腹を立てるから、そんな鬼は少しも恐くないよ。もう少し神々しい處を附けたいね。」

「何を云つていらつしやるの、餘計のことですよ。あなたも死んでおしまひなさいよ。私も死にます。見ると憎くなる。聲を聞くと腹が立つ。そして死んだあとに後つて居られるのは氣掛りでしやうがない。どんなことをなさるか知れないから。」

「さうださうだ。一緒に死なうと約束をして来たのだものね。」
何かと云つて夕霧の君は妻を賺したり宥めたりして居た。娘らしい

無邪氣な人であるから、良人の言葉は口先だけのことであると思つて居ながら、何時ともなしに心が解けて行くのであつた。女二の宮も心の強い女性ではおありにならないが、若し知らない間に尼にでもなつておしまひになるやうなことがあつては世間へ對しても自分の體面が耻しいと夕霧の君は思つて、今夜も行かねばならぬやうに思ふのであつた。二人の幼い時の戀から女でも出来ないうやうに一つの戀を守つて、舅の大臣の壓迫にも堪へて居たことなどを夕霧の君は云つて子供もこんな大勢ある仲なのであるから、もう一人妻が出来たと云つても心の變るものではないなどと泣きながら云つて居た。雲井の雁の君も昔のことを思ひ出して、さすがに深い縁であるなどと思ふのであつた。出ようとして着更へをするために脱いだ良人の下着を引き寄せながら

「私は墨染の着物を着る人になつてしまはうかしら。」

と云つて居た。女二の宮はまだ座敷藏の中に入つておいでになるのである。せめて平常の御寢所でお寢みになるやうにと云つて女達が諫めるのを聞きになると宮もさうでなければ濟まないとお思ひになるのであるがこの藏を出た後の自分の身世間の非難などと云ふことをお考へになると、またお心が變つてその晩も夕霧の君に逢はうとはされないのである。

「更衣様のお服の三月の間だけは何事も精進して居たいと宮様はお思ひになるので御座いますから、そのお心持に御同情あそばせね。」少將はこんなことを云つた。

「私はよく承知して居るさ。宮様の仰つしやる通りになるさ。けれどもね、おまへなどは好いが外の女達の手前もあるからね、一緒の處でだけは夜晝居ないとかしい。さうかと云つて私が此處へ來なくなつてしまつては、宮様が却て世間の笑はれものにおなりになる

のだよ。」
夕霧の君は云つた。氣の毒で溜らないやうに少將は思つて女達の出入りする處にされてある座敷藏の北の戸口を夕霧の君に教へた。夕霧の君が入つて來たので宮はあさましくお思ひになつて女達と云つても誰一人頼みにするここの出來ないことを思つて歎いておいでになつた。上に被つておいでになる單衣の着物で身體を包むやうにして夕霧の君が何と云つても唯お泣きになるばかりであつた。餘りなお心に夕霧の君も悲しくなつて雲井の雁の心持なごをつくづくと思ひ遣つて居た。翌朝もその儘其處に夕霧の君は居た。藏の中もさほど多くの物が置いてあるのではなくて薰物の大箱や厨子棚が片脇に寄せてあつて見よい部屋の中やうに思はれる。大分明るい光りがさして來たので夕霧の君は宮のお傍へ寄つて上に着ておいでになる夜具を取つてお髪を撫でて繕つたりしてお顔を見た。品のよい

女らしいお顔である。寢間着姿の男は常よりも一層美しくも見られるのであつた。何程綺麗でもなかつた柏木の君にさへ愛されなかつた自分がその頃よりもまた一層衰へた今になつてこの人に添ふことが出来るものでないなどと宮はお思ひになるのであつた。二人の方のお手水や朝飯は平常の御寢所に運ばれたのである。宮が夕霧の君を良人にされたと聞いて以前はなかつた家來になりに来る男もあつた。夕霧の君はその儘三條へは歸つて來ないのであつたから捨てられてしまつたのであらうと思つて歎いて居た雲井の雁の君は試して見る氣もあつて父の太政大臣家へ行つた。院の女御が歸つて居る頃であつたから話し合ふのが嬉しくて雲井の雁の君はその儘歸らずに居た。夕霧の君はそれを聞いた。思ひ込んだらごんなことでもすると云ふ風な妻であるからと思つてそれに大臣も心の烈しい人であるから永久に歸さないと云ふやうなことになつては悪いと思つて三

條へ来た。若様は二人だけ残してあつた。姫様達と小い若様とを伴
れて行つたのである。手紙を度々遣つて迎ひの者を出すのであるが、
雲井の雁の君は返事も遣さない。この儘にしておいては大臣が悪く
思ふであらうと思つて、日の暮れるのを待つて夕霧の君は行つた。何
時も行つた時に居る座敷には女達ばかりが居て、雲井の雁の君は正殿
に居ると云つた。小い若様達は乳母に抱かれて其處に居るのである。
正殿へ行つて妻に逢つた夕霧の君は、

「私達のやうな夫婦が正殿交際をするのはをかしいぢやないか。ど
んな約束を長い年月に私達はした。一寸した戀の過りがあつたと
云つて直ぐこんな目に私を合すのはあなたの心得違ひだ。」
と云つた。

「捨て、おしまひになつた者にそんなことを仰つしやる必要はあり
ませんわ。心得違ひを直してももう仕方がないのですから。唯私

の生んだ子供だけは面倒を見てやつて下されば好い。」

と雲井の雁の君は云つた。夕霧の君は歎きながら強ひて歸れども云
はないで、その晩は大臣家で若様達を傍に置いて寂しく寝た。女二の
宮が今夜自分が歸らないので煩悶をしておいでになるであらうと思
ふと、また別に心が掻き亂されるやうになる。戀と云ふものはこんな
苦しいものであるのに、面白いことに人の云ふのが分らないなど、思
つて居た。翌日夕霧の君は、

「いよいよあなたが歸らないと決めたと云ふのなら私も考がある。

あなたは特別に選つて殘して行つた位であつた二人は可愛くないの
だらう。仕方がないから私一人で育て、見よう。」

と云つて妻を威した。平常の性質を思つて女二の宮の方へその二人
の子供を伴れて行くのではないかと雲井の雁の君は胸を轟かして居
た。

「姫様も私は伴れて行くよ。姫様を見に一々此處へ来て居られないから。」

夕霧の君は云つて、姫様に、

「母様のやうになつてはいけないよ。母様は思ひやりの心のない人なんだ。」

なご、云つて居た。太政大臣はこの夫婦がそんなことで争つて居ると聞いて、女二の宮のことがあつたと云つても、今急に實家へ歸つて來ると云ふやうなことは好くない。呼びに來たりする時に歸つた方がいゝと云ふやうなことを雲井の雁の君に云はすのであつた。大臣は辯の少將を使にして、女二の宮に手紙を持たせて上げた。

ちぎりあれや君を心にこめおきて、哀れと思ひうらめしと聞く。それにはこんな歌を書いてあつた。少將は一條の家へ来て、兄が生きて居た頃のことを思ひ出されて、感慨に堪へないやうであつた。

「私は此處へは度々來たのだから、他人の家のやうには思はないけれど、宮様はもう他人だと思つておいでになるだらう。」

こんなことを少將は云つて居た。

「私はこんな手紙の返事は書けない。」

と宮はお云ひになるのであつたが、女達が口を盡して漸う返事はお書せずすることにした。母が居たならば、自分は落度があつてもこの苦しき思ひは皆代つてしてくれるのであるのになご、宮はお思ひになるのであつた。

何ゆゑか世に數ならぬ身一つをうしとも思ひ悲しとも聞く

こんな歌をお書きになつたやうである。藤典侍は夕霧の君が雲井の雁の君に持つて居た愛をすつかり、女二の宮にお移したと云ふ噂を聞いて、さうでもない自分が憎い愛の競争者のやうに思はれて居たのが、侮り難い相手を持つて悶えて居るであらうと、さすがに氣の毒に思

つて、雲井の雁の君に慰めの手紙などを送るのであつた。この典侍は夕霧の君が雲井の雁の君と仲を裂かれて居た頃の情人で、その人と結婚をしてからは通つて行くことも偶さかになつて居た。然し双方とも子供の数は多くて雲井の雁の君には長男三男四男六男長女次女四女五女とあつて、典侍は三女六女次男五男と持つて居た。皆好い子ではあるが、典侍の腹の子の方が美しく、才なども勝れて居るやうであつた。三女と次男は花散里の君が引き取つて育て、居た。

製活日木木木
本版刷版版版
印

金秀西近長前
子村松谷田
督英熊川剛
太 熊 香
郎 舍 吉 茂 木 二

明治四十五年六月二十一日印刷
明治四十五年六月二十五日發行
大正三年一月十五日第七版

著作權
所有

著者 東京市麴町區中六番町拾番地 與謝野晶子
發行者 東京市麴町區平河町五丁目五番地 金尾種次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町二十七番地 佐久間衛治
印刷所 東京市京橋區西紺屋町二十七番地 英會社

金三圓

發兌元

東京市麴町區平河町五丁目五番地

金尾文淵堂

(特電) 東京三〇一九七番

晶子女史近作書目

□明	□夏	藤島武二氏彩畫	□一	藤島武二氏彩畫	□佐	中藤島武二氏彩畫	□春	藤島武二氏彩畫	□新	藤島武二氏彩畫	□新	藤島武二氏彩畫	□新	藤島武二氏彩畫	中澤弘光氏彩畫
る	よ	彩畫	隅	彩畫	保	泥	集	集	源	源	源	源	源	源	源
み	秋		よ						氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏
へ	へ		り						物	物	物	物	物	物	物
近刊	新刊		二	二	三	七	七	七	下卷の一	下卷の一	中	中	上	上	上
			版	版	版	版	版	版	下卷の二	下卷の二	卷	卷	卷	卷	卷
	金壹圓八拾錢		金壹圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金壹圓	金壹圓	金壹圓	金壹圓	特價金貳圓五拾錢	特價金貳圓五拾錢	特價金貳圓五拾錢	特價金貳圓五拾錢	特價金貳圓五拾錢	特價金貳圓五拾錢	特價金貳圓五拾錢

金尾文淵堂藏版

終